



（出所）Shutterstock “米国とベネズエラの原油取引を米国「エネルギー情報局（EIA）」の統計から確認”

米国とベネズエラの原油取引

株式会社ベネインベストメント
松浦 健太郎

暫 定政権が発足して以降、米国とベネズエラの関係は急速に改善しており、両国の経済関係は急速に接近している。

特に原油取引では大きな変化が起きており、この流れは政治関係に問題が生じない限り継続するだろう。

本稿では、両国の原油取引が最盛期にあった2010年から現在までの取引実績を振り返り、現在がどの段階にあり、将来的にどの程度まで両国の原油取引が回復する見込みがあるのかについて考察してみたい。

米国とベネズエラは相互依存の経済構造

米国とベネズエラは歴史的に密接な経済関係にある。米国は世界一の経済大国であり、経済の成長には大量の資源を必要とする。

一方、ベネズエラは世界一の原油埋蔵量を誇る国であり、それ以外にも天然ガス・鉄鉱石など天然資源に恵まれた国で、米国はベネズエラにとって豊富な資源を売りさばく絶好の相手と言える。

両国は経済的な利害が合致していることに加え、地理的にも近く、経済的に相互を必要とする体制になっていた。これは反米左派と言われた故チャベス政権下でも経済的には米国依存の体制は変わらなかった。

米国政府の制裁戦略で原油取引は増減

米国「エネルギー情報局（EIA）」の長期推移グラフによると、2010年代前半には、米国によるベネズエラ産原油の輸入量が日量100万バレルを超える局面もあった（下グラフ参照）。

しかし、2017年8月に米国がベネズエラに金融制裁を発動し、更に2019年1月にはPDVSAに対する制裁を発動すると両国間の原油取引は大幅に減少。

19年6月には米国によるベネズエラ産原油の輸入量はゼロになり、両国のエネルギー関係は制裁によって断絶した状態になった。

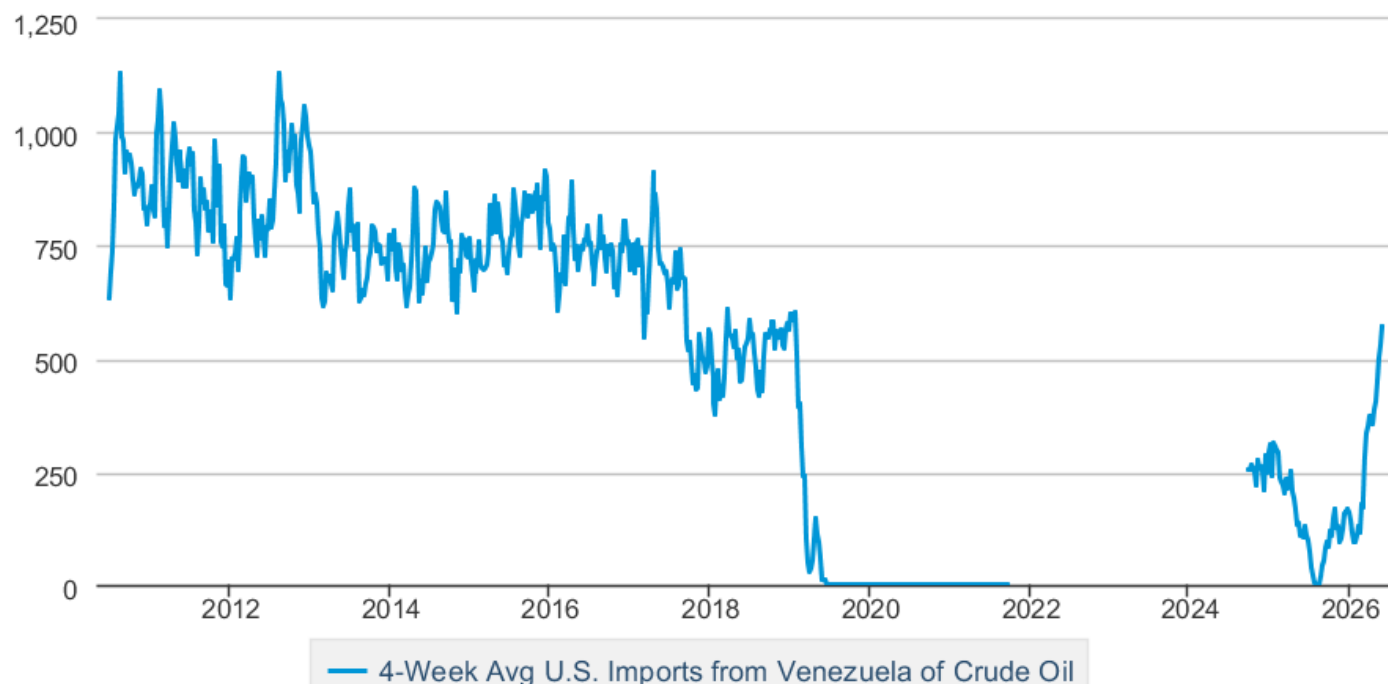
その後、バイデン政権下でベネズエラ方針が軟化し、24年10月から米国によるベネズエラ原油輸入が再開した。

当初の輸入量は限定的であったが、2026年に入ってから回復傾向が強まり、2026年5月末時点の米国によるベネズエラ原油輸入量は日量56.8万バレルまで回復している。

米国湾岸地域の製油所には、ベネズエラ産重質油を処理するのに適した設備があり、米国の製油システムに一定程度組み込まれている。過去には日量100万バレルを超える取引が存在したことを踏まえれば、現在の水準は回復初期段階にすぎない。今後、政治関係の安定と石油インフラの復旧が進めば、輸入量がさらに拡大する余地は大きい。

4-Week Avg U.S. Imports from Venezuela of Crude Oil

Thousand Barrels per Day



ホルムズ海峡封鎖受け中南米からの輸入増

「2026年 米国による国別原油輸入量」を見ると、米国の原油調達構造に大きな変化が見える。

ホルムズ海峡が封鎖された2月末時点では、米国の国別原油輸入においてサウジアラビアの存在感は大きかった。2月27日時点の輸入シェアは、カナダが69.4%、サウジアラビアが9.2%、コロンビアが5.1%、メキシコが4.3%、ベネズエラが2.5%であった。

しかし、3月以降は中東・アフリカからの輸入が相対的に減少し、中南米からの輸入が増加した。

5月29日時点では、ベネズエラのシェアが9.8%（7.3ポイント増）、ブラジルが7.1%（5.3ポイント増）、メキシコが5.6%（1.2ポイント増）、エクアドルが5.2%（5.0ポイント増）となった。

一方、サウジアラビアは4.9%（4.3ポイント減）に低下し、イラク、ナイジェリア、リビアの比率も大きく低下した。

表：2026年 米国による国別原油輸入量(各週)

(単位:千バレル／日)

	カナダ	ベネズエラ	ブラジル	メキシコ	エクアドル	サウジアラビア	コロンビア	イラク	ナイジェリア	リビア
1月2日	4,121	120	168	306	0	353	209	129	162	99
1月9日	4,226	72	343	386	148	288	282	209	98	182
1月16日	4,108	101	71	242	102	296	357	251	39	0
1月23日	3,813	94	43	216	119	370	128	83	41	1
1月30日	3,731	175	241	311	0	437	75	325	213	108
2月6日	4,117	153	57	465	49	496	147	249	117	28
2月13日	3,877	49	208	325	50	707	221	371	1	191
2月20日	4,051	339	115	414	36	444	240	160	163	139
2月27日	3,930	143	104	245	7	520	289	154	202	71
割合	69.4	2.5	1.8	4.3	0.1	9.2	5.1	2.7	3.6	1.3
3月6日	4,227	232	50	140	0	607	76	309	156	2
3月13日	3,805	423	70	640	271	793	219	113	57	0
3月20日	3,927	549	164	227	0	605	88	270	59	0
3月27日	3,801	194	73	398	103	629	416	140	84	2
4月3日	4,271	321	114	165	0	589	0	120	0	42
4月10日	3,519	412	43	145	68	249	130	109	0	0
4月17日	3,814	499	240	248	0	515	138	48	136	0
4月24日	3,974	310	0	292	100	174	191	195	0	0
5月1日	3,268	400	57	327	165	332	348	76	93	0
5月8日	4,067	588	109	71	64	154	164	100	87	0
5月15日	3,792	713	173	383	157	155	154	67	0	0
5月22日	3,829	414	200	145	114	0	211	0	0	0
5月29日	3,677	568	414	323	300	283	167	43	23	8
割合	63.3	9.8	7.1	5.6	5.2	4.9	2.9	0.7	0.4	0.1
増減	△ 6.0	7.3	5.3	1.2	5.0	△ 4.3	△ 2.2	△ 2.0	△ 3.2	△ 1.1

(出所)米国エネルギー情報局(EIA)

例外的にコロンビアは輸入減

一方、中南米諸国の中でも、コロンビアからの輸入は例外的に減少している。2月末時点でコロンビアの輸入シェアは5.1%であったが、5月末には2.9%に低下した。これは、ベネズエラやエクアドルとは対照的な動きである。

各週の輸入統計は速報値であり、油田の生産動向、出荷タイミング、製油所側の需要などタイミングによって大きく振れる点は考慮する必要がある。

そのため、政治要因だけで説明することは避けるべきだが、トランプ政権とペトロ政権の政治関係が良好とは言い難いことも事実だろう。政治的な対立は、米国側の調達判断において一定の心理的・政治的リスクとして作用している可能性がある。

制裁緩和で元々存在していた需要が表面化

米国にとって、ベネズエラ産原油の重要性は複数の側面から高い。

第一に、地理的な距離が近く、調達先としての利便性が高い。

第二に、米国湾岸地域の製油所は重質原油の処理に適した能力を有しており、ベネズエラ産原油には底堅い需要がある。

第三に、ホルムズ海峡封鎖のような地政学的リスクが高まる局面で、近隣地域からの供給確保の重要性が高まっている。

第三の理由は、この数カ月の国際情勢の変化で浮上した要因である。一方、第一、第二の理由は、2019年のPDVSA制裁以前から存在していた。

その意味で、足元の輸入回復を「米国の関係改善による成果」とだけ見るのは一面的だろう。

そもそも、米国によるベネズエラ産原油の輸入が急減した最大の要因は、市場の自然な判断ではなく、米国政府による制裁という政策的な遮断だった。

米国が自ら取引を制限し、その後に制限を緩和したことで、もともと存在していた取引関係が部分的に戻りつつあるというのが実態に近い。

もちろん、ベネズエラ側にも生産能力の低下、石油インフラの老朽化、投資不足といった制約があり、輸入量が直ちに過去の水準まで回復することはない。しかし、今回のホルムズ海峡封鎖もあり、ベネズエラ産原油の需要は更に高まっている。

今後の焦点は、米国がベネズエラとの原油取引をどこまで通常の状態に戻すのかにある。

制裁という障害が緩和され、政治関係が安定すれば、両国の原油取引は一定の水準まで回復する可能性が高い。

過去には日量100万バレルを超える取引実績があったことを踏まえれば、現在の回復はまだ初期段階にすぎず、米国とベネズエラの原油取引にはなお大きな伸びしろが残されている。

以上